
学園のアイドルと少年

鈴木健

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園のアイドルと少年

【Nコード】

N8987W

【作者名】

鈴木健

【あらすじ】

平凡をこよなく愛し続けてきた少年、工藤悠は、ある日、突然学園のアイドル 一之瀬綾香から告白された。勉強ができるわけでもなく、スポーツが優れわけでもなく、イケメンというわけでもない（本人談）悠にとっては予想の欠片もしていなかった。さて、これから悠の生活に何が変わるのだろうか。

プロローグ 突然の告白

突然だが、この学校にはアイドルというものがいる。

アイドルとかこの都市伝説だよとか、もうその言葉自体死語かもしれないが、この学校には本当に芸能人顔負けの容姿をして、性格もよし、勉強もできるといった、それはそれはまるで漫画や小説の世界の人みたいながいる。

その人が何かしたら、たちまち噂になり、人々の注目を集めている。

まあ、俺には関係ない話だ。

そう、本当に関係のない話。俺は、ごく普通の毎日を、淡々と、そして着々と過ごしていきただけだし、そんなアイドルとか言われている人を追いかけたり、ましてや付き合いたいとも思っていない。

そんな人がもし俺と何か付き合ってみる。自分で言うては悲しくなるだけだが、どうしてお前と何か付き合っているんだとか言われるのがオチだ。

俺はそういうのはごめんだし、自分の力量もわかっている。そういう人は、イケメンとでも付き合うのが通りであろう。美少女にはイケメンを、普通の人にはフツメンを、不細工の人にはブサメンを。まあ、例外もある。それは、何かに優れている人であったり、何かに堅実だったり、そういった人達が女性の人を魅惑していく。

……まあ、良いんじゃないか？ そういうのがあっても。さて、どうして俺がこんな話をしているかと言うと理由があるんだ。

それは海よりも深い話でもある訳でもない、それこそ漫画や小説にありがちな話だったりもするんだ。

「お願いします！ 私と付き合ってください！」
告白された。

急展開で俺の思考回路がよく働いていないが、これだけ率直に伝えられたら誤解も何もないと思う。

某月某日俺は、学園のアイドルとまで言われている少女に告白されたのだった。

好きな言葉は平凡。嫌いな言葉は非日常。

平凡をこよなく愛し続け、今日のこの日までなにも目立ったことも、噂になるようなことも、ましてや事件や事故に巻き込まれたりしてない。

なのに、なんで！

嗚呼、お父さん、お母さん、今日も俺は元気にしています。

天を仰ぎながら、とりあえず現実逃避。……結論、無駄。

こんなことしていても解決法には繋がらない。そんなことはわかってる、……わかつてはいるんだけど、そうせざる負えないのがこの現状だ。

だってそうだろ？ こんな好きな言葉は平凡とかぬかしている奴だぜ。そんな奴に学園のアイドル様が俺に告白なんぞ予想できるはずないだろ。こういつちゃなんだが、これを予想するよりも宝くじで1等を予想するほうが簡単だと俺は思う。

「あのっ！ やっぱり、……だめ、かな？」

いつまでも返事をしない俺を見かねてか、学園のアイドル様が俺にそう聞いてきた。

やっぱり恥ずかしいのか顔をうつむいたまま、しかし眼はしっかりと俺のほうを見ていて、手は緊張からか震えてそれを抑えるかのように組んでいて、まるでお願いするような感じになっていた。心なしかちよっと涙ぐんでいるようにも見える。

……卑怯！

不覚にもドキツとした。

そりゃあそうだろう。なにせこんな美少女から上目遣いなんかされたらドキツとくるだろう。むしろしないやつなんか不能だ。

そりゃあまあ、美少女と付き合いたいと思わなかったわけでもない。俺だって男だ、そういうことを思ったこともあったさ。でも、それはそれ。まず考えてもみる、おかしいだろ？ 取り柄もない男に学園のアイドル様が告白してくるんだ？ 何か裏があると考えるもおかしくない。いや、むしろ何かあると考えていい。それに、仮に何もなしとしても、俺と学園のアイドルが付き合ったら学校中その話題に染まるし、ついでにやつかむ輩も増えるだろう。俺はそんなのはごめんだ。

まあ、どうせ裏になにかあるに違いない。とりあえず理由を聴くことにしよう。

「どうして？」

「……ん？」

「どうして俺なの？」

自分でも答えづらい質問だとは思う。だが、そのことを聴かずにはいられない。何かあるにしても、ないにしても、素直に聴いてみたい疑問を問いかける。

「貴方が好きだからです」

「……まあ、告白だし？」

「俺のどこが？」

「好きになるのに理由って必要なの？」

そりゃあそうだ。

まあ確かに、相手のここが好きで、それからこういうところも好きで、あとこういうところが好きだから貴方と付き合いたいです。といえる奴なんて殆どいないだろう。……ていうか、そんな告白は嫌だ。

「それに、まあ強いて言うなら、一目惚れかな」と、微笑みながら

彼女は言う。

……だめだ、敵わない。

他にも、聴きたいことはあるし、対抗策もあるけど、……でも、こんなに真っ直ぐな眼をした少女には敵わないと俺は思った。

……ああ、悔しいな。

俺も学園のアイドルに　一之瀬綾香に、惚れてしまいそうだ。

第一話 日常

「それで、……返事聴かせてくれる、かな？」

つい見惚れてた俺に、一之瀬さんがそう問いかけてくる。

「いいよ」

思わず口に出た言葉に、一之瀬さんが一瞬固まって「え？」と、聞き返してきた。

……あれ、なんかまずいこと言ったような。そう思った時にはもう遅かったようだ。

「本当に、……いいの？」

「うん、俺なんかでよければ」

おい、なにを口走っている、俺。

信じられないというばかりに、一之瀬さんが、感激のあまりか手で口を被い、涙を流している。

あー、これは腹を括るしかないみたいだな。

ただでさえかわいい容姿に、あんな真剣な真っ直ぐな眼をしていたら、いくら俺でも本気っていうのが眼に取れる。それに、あんな笑顔を見せられたらたまったもんじゃない。

それに、どうやら俺は、思いのほかに一之瀬さんのことが好きになっっているみたいだ。

ああ、さようなら、平凡で平和な日々。

涙を流して喜んでいる一之瀬さんを見ながら、明日から大変そうだなと、不謹慎ながら頭でいっぱいになっていた。

しばらく時間が経ち、一之瀬さんもそろそろ落ち着いてきたみたい。結構の間、泣いていたためか、眼が軽く充血しているようだ。

「大丈夫？」

「あはは、ごめんね。見苦しい所みせて」

そう涙を拭いながら、微笑む一之瀬さん。

「いや、そんなことないよ。それより、本当に俺なんかでいいの？」
「なんで？ 私から告白したのに」

本当に不思議そうに、キョトンとした表情でこちらをみる。

しかし、こうしてあらためてみると、学園のアイドルと騒がれるのもわかるような気がする。髪もさらさらだし、顔も小さくて眼がぱっちり和小動物みたいな眼をしているし、身体も出るところはでている。それに性格も良い。

確かに、このような美少女が身近にいたら、眼で追いかけたくなるし、少しでも仲良くなりたいたいと思うかもしれない。まあ、あくまで一般論だが。

「だって、一之瀬さんかわいいし、俺よりも良い人なんか沢山いるでしょ」

「私は、工藤くんだから好きになったんだよ」

「俺だから？」

うん、と頷く一之瀬さんに、更に首をかしげる。

俺、なんかしたっけ？ いや、学校内では目立つようなことは一切していないはずだし。それとも、街中で一之瀬さんに何かしたとかかな。いや、それでも、このような人を忘れるはずがない。

んー、と考えている俺が可笑しいのか、クスクスと一之瀬さんが笑う。

「まあ、工藤くんは気づいてなくて当然か、あ！ 忘れてた、今日用事あったんだ。ごめんね悠くん、また明日の朝ね」

バイバイと手を振りながら、走っていく一之瀬さんを見ながら、手を振り返すことしかできなかった。

「さん、起きてください。兄さん！」

重たい瞼をあけ、誰かと思いつつ確認してみると、鈴とした声で、俺を揺すり起こしてくるのは、俺の妹の理沙だった。まあ、そりゃ

あ理沙以外、俺を朝起こしに来る人なんかいないから当たり前か。

「おはよう、理沙」

「はい。おはようございます、兄さん」

少し欠伸をして、重い瞼を擦りながら今の時刻をみる。

時計の短い針が六の数字を示している。うん、いつもながらの時間だ。

「ほら、兄さん。顔でも洗ってきてください。私は朝食の支度をしていますから」

そういいながら、俺の部屋を去っていく理沙に続き、俺も顔を洗うために洗面所へと向かう。鏡の向こうにはいつも見慣れた顔があり、そこには冴えない顔がこっちを見つめている、……冴えない顔してるな俺。

顔を洗い、見出しなみを整えて、リビングへと向かうとそこにはエプロン姿の理沙がいた。

相変わらず俺の妹でありながら、整った容姿とスレンダーな肢体でも、出るところはちゃんと出てるという、俺と一つしか変わらないというのに、何か気品があるような気がした。

「あ、兄さん。少し待ってくださいね、今運びますから」

「そういう、出来上がった品をテーブルへと運んで行く理沙、本当に出来た妹である。」

何もなかった食卓に、つい先ほど出来たと思われる品がどんどん埋まっていく。

味噌汁にご飯に焼き鮭にほうれん草のお浸しに卵焼き等々。朝食だからといって、ここまでちゃんとした食事は珍しいのではないだろうか？

過去にそう疑問に思った俺は妹に聴いてみたことがある。妹曰く「朝食は、一日の全ての始まりです。疎かになんかできますか！」と、力説しながら十分近く話を聴かされた。

過去今までに、朝食を食べないことなど一度もなかったが、もし

そんなことがあったら、………考えただけでも寒気がする。

「はい兄さん、お待たせしました。では、食べましようか」

そう言いながら、席に着く理沙に続いて、俺も席に着く。食卓に並ぶおかずの品々、これを理沙が早起きして、いつも毎日作っているというのだから、あらためて考えるとすごいと思う。

「いつもありがとな」

「ん、急にどうしたのですか、兄さん？」

「こらこら、頭でも打ったのかな？　みたいな顔をしない。

「いや、ただ言いたかっただけだ」

「まあ、父さんと母さんに任されてますしね。これくらいはしないと」

「……ああ、そうだな。まあ、冷めないうちに食べようか」

「そうですね、では」

『いただきます』

そういって、朝食を食べる俺と理沙。いつも通りの、何も変わらない日常。

「お、この鮭美味しいな」

「わかります？　昨日、新鮮な鮭が手に入って焼き魚にしようと思っただんです」

「ああ、この鮭だけでご飯二杯は余裕だ」

「もう、兄さんったら」

クスクス笑う理沙に、俺も釣られて笑う。

こうして、今日も工藤家の何も変わらない日常が始まる。

第二話 変化

「さて兄さん、そろそろ学校に行きましょうか」

「あれ、もうそんな時間か」

食事を済ませてゆっくりしていた俺に、理沙がそういつてくるころには、時刻はちょうど八時に差し掛かるところだった。

俺と理沙は、同じ学校に通っているので、いつも八時になると理沙が教えてくれる。目的地も同じなので、一緒に登校しているのだが、そのせいでいつも幼なじみの結衣と幸也にからかわれたりしたりする。

あいつら曰く『いくら兄妹だからって、高校生にもなって一緒に登校などしない！』だそうだが、この生活をずっと続けてきた俺たちにとっては、あまりピンとこない。

「じゃあ、行こうか」

そう俺が言うと、「はい、兄さん」とうれしそうにいう妹の顔を見ると、思わずこちらまで和んでしまう。

こんなことでうれしそうにする理沙を見ると、こっちまでうれしくなるから不思議なものだ。ああ、こんなことだから、あいつらにシスコンとか言われるんだろうな。

でもいいさ。だって、こんな些細なことだけで、理沙がよろこんでくれるのだから。

玄関を開けた先には、見慣れた景色と、道が連なっている。幸い、この家から学校までは近いから、毎日遅い時間でも遅刻せずに登校できる。

「おはよう、悠くん」

さて、今日も元気に登校しますか。

理沙が、忘れ物をしたらしいので、少しだけ待つことになったけど、まあ、遅刻するほどの時間でもないし、あまり急ぐ心配もないだろう。

「悠くん？」

それにしても、理沙遅いな。一体どうしたのだろうか。

「……………むむむ、こうなったら」

ふと急に、俺の首まわりにやわらかい感触が……………。

これは腕？

「おはよう、悠くん」

そういつて、俺の首に手をかけて抱きついてきてるのは、学園のアイドルこと、一之瀬さんだった。

「……………なにしてるの」

「悠くんが、話しかけても無視するんじゃない」

そういいながら、頬を膨らませて口を尖らす一之瀬さん。

うん、気づいてたさ。

一之瀬さんがさっきから話しかけてきていることも、玄関から出たら待ち伏せているのも気がついてたさ。でも、理解したくなかった。だって、この先の受難が待ち受けていることが分かっているのだから。

「なんで、俺の家の前にいるの？」

まあ、なんとなく分かるけど。

すると、笑顔で、

「だって、昨日にいったでしょ？」また、明日の朝ね』って」

ほら、やっぱり。

あの時は、色々と頭が混乱してて、あまり気にしていなかったが、いづれこうなることは分かっていた。

だが、問題ないさ。そのことも含めて付き合っつて決めただから。でも。

「お待たせしました、兄さん。あれ、そこに誰かいるんですか？」

「おはよう。確か、理沙ちゃんだったっけ？」

「……………」

……………あ、理沙が固まった。

「少し、失礼します。兄さん、ちょっとこっちへ来て下さい」

理沙のその言葉に、素直に従う。

だって、あの眼はやばい。俺の本能が、危険と知らせてくる。

「一体、これは、どういうことですか？ 兄さん」

とびっきりの笑顔で、俺に問いかけてくる理沙。

なんていうか気迫が凄い。今の理沙なら、プロレスラーですら裸足で逃げるレベルだろう。……………けしてそんなことを本人にはいえないが。

「……………いや、……………特に大したことは」

「へえ」

そう言いながら、眼を細める理沙。

あ、やばい。

「学園のアイドルとまでいわれている綾香先輩が、兄さんが登校するまで、玄関先で待ち伏せしていて、それに加え兄さんの首もとに抱きついていたのに、それが“大したことない”って言えるんですね」

「そんなんですかー、と白々しく言う理沙。どうやら今の俺の回答で、機嫌を完全に損ねさせたみたいだ。

「さっきまで『はい、兄さん』と、よるんでいたのが嘘みたいじゃない機嫌になっている。」

「どうすれば機嫌をなおすかなと考えていると、

「もしかして、兄さん。綾香先輩と付き合うことになったんじゃないじゃないですか？」

「アハハ、そんなことないだろう」

理沙の突然の問いかけに、つい棒読みで答えてしまう俺。

「笑いが乾いてますよ、兄さん。まあ、そんなことだろうかと思いましたが。昨晚、兄さんの様子がおかしかったですし」

やれやれと肩をすくめるでこちらをみる理沙に対して、眼をそらす。相変わらず感のいい妹だ。すると、小さな声で理沙が何か呟いた。

「……………兄さんのほか」

「ん、なんか言ったか？」

「いえ、なんでもありません。あ、そういえばちよつと用事を思い出しました」

では、綾香先輩、兄さん、お先に失礼します。と言い残し立ち去る理沙。一之瀬さんもちよつと戸惑ったようので、二人でその姿を見送ることしかできなかった。

「じゃあ、俺たちも行くかうか」

「……………うん、そうだね」

そう言いながら、俺たちもゆっくり歩き始める。

「ねえ、悠くん」

「ん？」

「迷惑だった？」

その問いかけにそんなはずないと笑いながら答える。

迷惑なはずがない。だって、俺を待っていてくれたんだろう？

俺の家の玄関先に、いつでてくるかわからない俺たちを、一人で待っていた一之瀬さん。

まだ、俺だから好きになった。っていう理由も聴いていないけれど、こんな姿を見るとつい和んでしまう。

その言葉に安心したのか胸をなでおろすと、何故か急に走り出す一之瀬さん。その走り姿はあまりにも優雅で華麗に見えた。少し見惚れていると、立ち止りこちらに振りかえる。

「ほら、悠くん。早くしないと遅刻しちゃうよ」

そう言いながら、俺を急かす一之瀬さん。胸ポケットから携帯取り出して時刻を見てみると、既に二十分を越していた。

「ほら、早く早く」

「ちょっと待ってくれ」

そう言いながら、俺も走り出す。どろぢら、ゆっくり登校している暇はないようだ。

「『兄さんのばか』か」

ただそんな中、理沙のその言葉が、何故かいつまでも心に引っ掛かっていた。

第三話 親友（前書き）

なんか、どんどん駄目になっている気がする……。

第三話 親友

「はぁ……」

「どうした悠、辛気臭い顔して。なんかあったのか？」

さっきの理沙の言葉が、何故かいつまでも心に引っ掛かっていた俺は、どうやら思っているよりも、表情に出ているようだ。

「ああなんだ、幸也か」

「『なんだ』って……」

そういつて頂垂れる幸也。無意識でいった言葉だが、予想以上に幸也にダメージを与えたらしい。……とりあえず、こいつをどうにかしとくか。

「あはは、うそうそ冗談だって。お前のことは大事な親友だと思っているよ。……多分」

「おい、聴こえてるぞ」

ジド眼で返してくる幸也の言葉に、とりあえず笑ってごまかす。

こいつとは、もう付き合っても長いので気兼ねなくこういった悪ふざけもできる。俺の態度に呆れたのか、幸也はもういいや、と半ば諦めた様子でため息を吐く。

「そついえばさ、悠。通りすがりに聴いたんだけどさ」

「ん、どうした？」

「お前、一之瀬綾香と一緒に登校してきたって本当か？」

「ぶはっ」

その問いかけに、思いつきりせき込む。

いづれこうなることは予想していたが、正直、遅い時間に登校して、周りに生徒がいなかったので、今日は大丈夫かと安心しきっていた。

大方、誰か窓から俺たちが走ってくる姿を見たのだろう。流石はアイドルといわれるだけあって、その話題性は大きいらしい。

そんな俺の様子をみて、幸也はやれやれと呆れながら会話を続け

る。

「その様子からすると本当みたいだな。……もしかして付き合っているのか？」

その言葉に再びせき込む。

幸也はというと、……おいおいまじかよと言いなながら顔が引きつっている。まあ、その気持ちは分かる。俺だって幸也が一之瀬さんと付き合っているとかわれたら、同じ反応をするだろう。

「だれにもいうなよ」

「あはは、あんまり俺を甘く見るなよ」

「だよな。俺はお前みたいなやつを親友に持って幸せだよ」

そう言いながら、俺は幸也の背中をバンバンと叩いて、友情を深めあった。

「ねえ、一之瀬さんに彼氏ができたんだって！」

「え、あの綾香様に彼氏が!? 一体どんな人なのかな」

「なんか工藤悠って人らしいわよ。だれか知ってる？」

「えー、知らなーい」

「俺のマイエンジェルに彼氏だと……!!」

「誰だよそいつは、この俺が見定めてやる」

「あはは、みんなバカだなー。僕の綾香さんに彼氏なんてできるはずないじゃないかー」

……………。

「なあ、幸也」

「どうした、悠？」

自分には関係ないみたいな顔をしてこちらを見る幸也。

「まさかとは思つが、お前が情報流したんじゃないよな？」

「はあ? あんまり俺を甘く見るな」

その言葉に、キレだす幸也。

そつだよな、いくら幸也だからって疑い過ぎていた。

「すまん幸也、疑って悪かった。そつだよな、いつも俺を困らしてそれを楽しむ幸也だとしても、流石にこんなこと」

「こんな面白い情報、俺が流さないはずないだろう　痛ッ！」

とりあえず殴った。

こいつだけは許さない。

「うわ、ちょ、やめろって」

倒れている幸也に、さらに殴ろうと立ちあがる。

くそ、こいつを信用した俺がバカだった。普段すっかりしている幸也だが、面白いことには食いつくやつだった。どうやら俺は、こんなことが分からなくなるくらい気が動転していたらしい。

「あのー、悠さん。なんで辞書なんて持ち出してるんでしょうか？」

「あはは、考えればすぐにわかるだろう？」

そう言いながら上に振りかざす。流石の幸也もびびったのか右手をこちらに向けて、後ずさりしているようだ。まあ、だからと言っただってやめないが。

「おい悠、それは流石に洒落にならないって！」

……知ったことが。

「せーの！」

幸也に目掛けて振り落そうとした瞬間、クラスの扉が勢いよくバシッと開かれた。

誰かと思いついてみると、もう一人の幼なじみの結衣だった。

「悠これはどういうこと！　一之瀬さんと付き合っているって本当なの　ってあんたら何やってるの？」

「いや、ちょっとした戯れだよ。ほら、俺たちって仲良いからさ」

「おい！　今、俺をその辞書で殴ろうとしてただろ！？」

「それで、結衣。どうかしたの？」

「いや、クラスの女子から聞いたんだけどさ。悠が綾香と付き合っているというのでどこもかしこもその話題で持ちきりよ」

ガン無視ですかー！　と叫んでいる幸也は放っておく。結衣も全

然気にしていないようだ。

それよりも、もうそこまで広まっているか。

そういえば、周りの生徒もなんだか俺を見ながらヒソヒソと話しているような気がする。真相を確かめたいが、聴きだす勇気がないといったところか。

「綾香とは結構仲がいいからさ、聴いてみようかと思ったたら顔を真っ赤にして聴ける状況じゃないし、このままじゃ埒が明かないと思って、悠本人に聴こうかと思ったんだけど」

そういいながらジド眼でこちらを見る結衣。それにしても、結衣と一之瀬さんが仲良いなんて初耳だ。

しかしこんな早く広まるなんて予想外だ。幸也が言いふらしたりしたとはいえ、いくらなんでも早すぎだろう。

「それで悠、どうなの？」

まあ、こいつなら本当のことといっても平気だろう。

「本当だよ、一之瀬さんとは昨日から付き合い始めた」

俺のその言葉に、結衣は眼を大きく見開いて、でも何故か頷いていた。

理沙も結衣も驚くならわかるが、納得している意味がわからない。

「しかしあんたが綾香とねー、ふーん」

「な、なんだよ」

「別に、目立つことが大嫌いな悠が、綾香と付き合い合うところなるなんてわかってるのに、よく付き合ったねーって思っただけ」

「俺もそう思った！」

まあ、確かにそうなんだよな。

結衣も幸也も、俺の目立つのが嫌いというのは、わかっている。だから幸也もあんな風になっていたんだろうし、結衣もこうやって確かめに来たのだろう。

正直、俺だって理由はわからない。

でも、何故かあの笑顔に惹かれるんだよなー。

「まあ、話しが聴けたことだし私は教室に戻るわ。悠、がんばれ」

「ん、がんばれって何のことだ？」

「あれのことだろ」

結衣の声援に疑問に思ったが、それはすぐに幸也が解決させてくれた。幸也の指の先には興味心身に聴いていた生徒達。俺たちの声が大きくて、聞こえたのだろう。

……まあ、いいけどさ。

これから忙しいらしい。と思いながら、そつとため息を吐いた。

第三話 親友（後書き）

感想は作者の励みになります。

些細のことでもいいので感想を貰えたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8987w/>

学園のアイドルと少年

2011年9月26日03時10分発行